倉本一平

長谷川周三
の
歴史レポート

本能寺の変　その 3

長谷川　周三　（瑞浪高校 1970 年卒）
倉本一平　（瑞浪高校 1970 年卒）
2021 年 4 月

前回の「本能寺の変その 2」は、信長暗殺の黒幕は秀吉と公家の近衛前久ではないかというところまでお話ししましたが、では、光秀、秀吉、近衛前久が何故信長を殺さねばならなかったか、その動機に迫ってみたいと思います。
それは、当時ポルトガルからやってきた宣教師たちが、信長に大きな影響を与えたからです。

信長と宣教師

信長に拝謁した宣教師の一人ルイス・フロイスが、ローマにあるイエズス会本部に送った日本年報の中にこんな記録を残しています。
「信長に会って地球儀を見せますと、信長は非常に興味を持ち、いくつかの質問をしました。
そこで、信長には地球全体から見て日本は小さな島国であること、
ポルトガルから日本へは海路で 4 か月ほどかかり、その途方もない距離を移動出来る航海技術を持っていること、
その技術を使ってアフリカ・インド・中南米などに植民地や貿易拠点を設けていること、
祖国には軍隊を備えた国王がいて国を治めていること、などを言い聞かせますと、
信長は大変驚き、私たちの国の政策の強靭さに賞賛してくれました。そして、キリスト教の布教とポルトガルとの交易を許してくれました」。このようにして宣教師たちは信長に接近したことで、キリスト教の布教許可書である朱印状を手にすることが出来ました。

一方の信長は、天下統一後の国づくりをポルトガルやスペインに真似て自が国王となり、明国（中国大陸）などの近隣諸国を征服することで、領土の拡大を考えました。
当時の朝廷や足利将軍はすでに国を治める力を失い、信長の権力は猛威を振るっていましたので、信長が、朝廷を支配して自らが国王となることは何ら難しくなかった訳です。
また信長は、天下統一後の家臣の領土配分をどうするかを思案していました。
それは、天下が安定して戦がなくなると、家臣の中から天下を狙う謀反者が現れ、再び国が混乱することを危惧したからです。
明国征服が実現すれば、光秀や秀吉などの有能で謀反を起こす可能性のある家臣は明国に移封し、日本国内には信長の子息や柴田勝家のような信頼のおける譜代の家臣で、領土を占有したかったからです。
宣教師たちと信長の間では明国征服に向けて具体的な検討が進められ、信長からはポルトガル国王に対し、装備を備えた大型船と熟練の航海士などの手配を依頼しました。
こうした信長と宣教師との話し合いは秘密裏に行われていましたが、キリスト教の洗礼の受けた高山右近らには、宣教師から少しずつ情報が洩れ、やがて光秀や秀吉、朝廷の耳にまで届くようになりました。
そんな時期に大事件が起こります。
その一つは、織田家譜代の家臣で柴田勝家に次ぐ筆頭家老の佐久間信盛を、石山本願寺の調略に失敗したという理由で、高野山へ追放しました。
また、織田家譜代で信長を支えてきた重臣、林秀貞、安藤守就、丹羽氏勝らを、老齢を理由にことごとく追放して、領地を召し上げました。
このことにより、家臣の間では「生死を懸けた戦に挑んでも、信長の意に添わない結果を招けば、追放されるか、殺される」、「老いて功績なければ領土は召し上げられ追放される」といった不安が募り始めました。
光秀や秀吉の心中にも同様に「信長の下では安心して働けない」という信頼関係の陰りが見え始めました。
更に、信長は以前からキリスト教の布教に異を唱えていた正親町天皇に退位を勧め、誠仁親王の譲位を迫りました。
天皇家は神道・陰陽道を国の宗教としてきましたので、宣教師らが神仏を否定し、キリスト教を普及することは許せなかったわけです。
また、誠仁親王の五男邦慶親王は信長の猶子となっていましたので、正親町天皇からしてみれば、信長がいずれ邦慶親王を天皇に就かせ、自身は上皇として朝廷を意のままに操るつもりでいるだろうと考えたと思います。
一部の歴史学者の中には正親町天皇と信長は非常に友好的な関係であった、という見方をする人がいますが、どうもそうではなかったようです。
それは、元亀 4 年（1573 年）2 月に足利義昭を京から追放したあと、信長は朝廷に改元を迫りました。

改元はそもそも朝廷の権限で、征夷大将軍でもない信長が改元しろと朝廷に申し入れることは、正親町天皇にしてみれば、由々しきことだったに違いありません。
また、その翌年の天正 2 年（1574 年）に信長は自らの権力を世間に誇示するために、正親町天皇に高圧的に蘭奢待（らんじゃたい）の切り取りの勅許を求めます。
蘭奢待は聖武天皇の遺宝とされる香木で、その切り取りは歴代の天皇家の人々でさえ出来なかったほどの宝物です。
怒りをあらわにした正親町天皇は近衛前久を呼びつけ「聖武天皇の憤りが思われ、天道に照らして恐ろしいこと」と記した書状を信長のもとに送り付けました。
すると信長は「朝廷への資金援助は、今後考えなくてよいのだな」と近衛前久に厳しく迫ったので、今度は近衛前久が正親町天皇を説得することになり、渋々勅許を出すことになりました。
そして天正 9 年（1581 年）2 月に京都で行われた信長主催の「馬揃え　注1」で、信長と正親町天皇の間に大きな軋轢が生じます。
それは、信長が招待した宣教師ヴァリニャーノ達が正親町天皇に拝謁を申し出た際、信長が通訳のルイス・フロイスに「予がいるところで天皇の機嫌を取る必要は無い。なぜなら予が国王であり内裏（天皇）であるからだ」と話したのを正親町天皇や公家衆がすぐ近くで聞いていたからです。
正親町天皇始め公家衆は大きな衝撃を受けますが、信長が巨大な軍事力と財力を背景にして国王と称したことに正面から異を唱えることは、どんなに憤懣やるかたない正親町天皇でも出来なかったようです。
信長の傲慢で尊大な立ち振る舞いは日に日にエスカレートしていき、やがて正親町天皇退位事件に繋がっていきました。
こうした朝廷や信長の家臣に対する信長の非道かつ傍若無人で独裁者的な行いに業を煮やした正親町天皇は、ついに近衛前久を呼び「どこぞに、信長を討てる者はいないか」と勅令に似た懇願がなされました。
近衛前久は天皇の願いを聞き入れるかどうか悩みます。失敗すれば自らの命ばかりでなく、関わったもの全ての命が奪われ、天皇の運命までも左右しかねないからです。
しかし、信長を殺さねば古（いにしえ）から続いてきた天皇の権威が衰退してしまいます。
そこで近衛前久は、どうにかして信長を京におびき寄せ、警護の手薄な状況を作って信長を殺害することを考えました。そしてその協力者として光秀と秀吉に白羽の矢を放ったわけです。
ここからがいよいよ信長殺害のクライマックスになりますが、この続きは次回の「本能寺の変その4」でお話ししたいと思います。
常日頃から人一倍警戒心の強かった信長を光秀、秀吉、近衛前久がどうやって死に追い詰めていったのか、その壮絶なドラマを次回は展開します。ご期待ください。

注1：　馬揃えには正親町天皇を始め近衛前久ら多くの公家衆を招待し、行進参加者は光秀や柴田勝家など家臣 6 万人、観客は 20 万人を超えたと言われています。